

## 『太平広記』の中の「神仙」「神人」「真人」「仙人」像

—六朝時代までの書物を中心として—

宮本紗代

## はじめに

筆者は六朝時代までの書物の中に登場する「神仙」「神人」「真人」「仙人」の呼称の違いに注目し、超自然現象<sup>①</sup>の観点からも、それぞれの呼称は同一視できないと考察してきた。

ここで、これまで考察してきた六朝時代までの書物の中の「神仙」「神人」「真人」「仙人」像について振り返っておく。

まず、漢代までの書物の中の「神仙」は、主に具体的な個人を指さない呼称として用いられていた。また、「神仙」は「神人」と「仙人」とを包括する呼称として用いられていた。

「神人」は、「神仙」「真人」「仙人」に比べて見た目が人間離れした異形である者も多い。加えて、「神人」は出身地が明記されておらず、もともと人だった者がなった例が見られない存在であった。

「真人」については、出身地の明記された者が「真人」と呼称されることがあり、人にもなれる存在であった。しかし、「真人」は形が無い場合があり、精神が安定していて夢を見ないこと、鬼神を役務することがあり、同じくもともと人だった者にもなれる「仙人」に比べると簡単になれる存在には見えなかった。

「仙人」は、出身地が明記され、蘇生の超自然現象を起こしており、もともと人だった者にもなれる存在であった。また、謫仙人<sup>②</sup>や斥仙<sup>③</sup>

のように、罪を得て仙界から追放されて人間界にやってきたかのような印象を世間の人々が「仙人」に対してもつことがあった。

なお、出身地を明記するということは、第三者が何らかの理由で対象者を人間社会にあるその土地の出身だと認めていたからであり、もともとは人であったことの傍証になると推測する。

姚聖良氏は、

而對于那些完全出自于民間伝説的仙人、『列仙伝』同様也是按照『史記』列伝之体例、將他們的身世、來歷一一予以具体落實。

……（中略）……『列仙伝』、『神仙伝』有意採取嚴謹的史伝体

例、開篇介紹伝主生平、且言之鑿鑿、其目的就是在伝記開頭便給讀者以神仙實有的真實印象。

と、『列仙伝』では民間人に対しても『史記』列伝のように出自を記していることを指摘し、『列仙伝』や『神仙伝』は史伝の構成に基づいて伝主の生涯を記すことで、読者に神仙が実在したという印象を与えることができる<sup>④</sup>と述べている。このことから、出自を記すことはその者の実在を示す方策であるとみて良い。

次に、六朝時代の書物の中の「神仙」「神人」「真人」「仙人」像について振り返っておく。

「神仙」は、六朝時代の書物においても、漢代までの書物と同じく、主に具体的な個人を指さない呼称として用いられており、出身地が明

記される場合があった。また、「神仙」は「神人」と「仙人」とを包括する呼称として用いられていた。

「神人」は、漢代までの書物と同じく、主に出身地の記述は無く、もともと人だった者がなれそうにない存在であった。また、自主的に一般人を助けることはなかった。

「真人」は、漢代までの書と同じく、出身地の明記された者が「真人」と呼称されることがあり、人にもなれる存在である。とはいえ、同じくもともと人だった者にもなれる「仙人」とは異なり、「真人」が一般人に従う記述は見られなかった。このことから、「真人」は「仙人」に比べて地位が高く、簡単になれそうな存在ではない。

「仙人」は、漢代までの書と同じく、出身地が明記されることがあり、もともと人だった者にもなれる存在のようであった。また、<sup>4</sup>斥<sup>5</sup>仙<sup>6</sup>のように、罪を得て仙界から追放されて人間界にやってきたかのような印象を「仙人」に対して世間の人が持つことがあり、仙界のような異世界が存在していると認識されていた。追放されるということ、さらに上の地位の者が存在することを示している。このように仙界から追放されることは、「神仙」・「神人」・「真人」では見られない特徴だった。このことから、「仙人」は他の呼称に比べて地位が低いと思われる。

これから見ていく『太平広記』は、北宋時代に編纂された類書である。本論では、『太平広記』に引用されている六朝時代までの書物のうち、筆者が未見であった『洞仙伝』、『西京雜記』、『漢武内伝』、漢・郭憲『漢武洞冥記』、劉宋・劉義慶『幽明録』、劉宋・沈遠『南越志』、劉宋・劉敬叔『異苑』、南齊・王琰『冥祥記』、南齊・劉澄之『鄱陽記』、梁・蕭綺『王子年拾遺記』、梁・程慧『高僧伝』の中の「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」像が、これまで考察してきた六朝

時代までの「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」像と差があるのかについて考察する。

なお、『太平広記』の底本には、明・談愷が刊刻した『太平広記』を底本としている張国風『太平広記會校』（北京燕山出版社、二〇一一年）を用いた。

## 第一節 神仙

これまで見てきた六朝時代までの書物の中の「神仙」は、主に特定の個人を指さない呼称として用いられていた。『太平広記』の中の六朝時代までの書物でもその傾向は変わらなかった。

特定の個人を指さない呼称として「神仙」が登場していたのは以下の通りである。『漢武内伝』を引用している神仙三「漢武帝」の「好神仙之道。（神仙の道を好む。）」「以求神仙之応。（以て神仙の応を求む。）」「乃信天下有神仙之事。（乃ち天下神仙の事有るを信ず。）」<sup>5</sup>。梁・蕭綺『王子年拾遺記』<sup>6</sup>を引用している女仙一「玄天二女」の「王好神仙之術。（王神仙の術を好む。）」<sup>7</sup>。ここでは、燕の昭王が「神仙」の術を好んだことを記している。『西京雜記』を引用している夢一「司馬相如」の「言神仙之事。（神仙の事を言う。）」<sup>8</sup>。また、南齊・王琰『冥祥記』を引用している報応十三崇経像「葛濟之」には、「葛濟之、句容人、稚川之後。……（中略）……濟之世々神仙を事とす。」とある。「葛濟之の後なり。……（中略）……濟之世々神仙を事とす。」とある。「葛濟之、句容人、稚川之後」とあるように、葛濟之は『神仙伝』や『抱朴子』を著した東晋・葛洪の子孫である。

次に、「神仙」が「神人」を包括する呼称として登場している例を見ていきたい。『洞仙伝』を引用している神仙三十三「張巨君」では、

張巨君者、不知何許人也。時有許季山、得病不愈、清齋祭泰山請命、昼夜祈訴。忽有神人來問曰、汝是何人。何事苦告幽冥。天使我來問汝。可以実対。季山曰、僕は東南平輿許季山。抱病三年、不知罪之所在、故到靈山、請決死生。神人曰、我是仙神張巨君。吾有易道、可以知汝禍祟所從。季山因再拜請曰、幸神仙遷降。願垂告示。巨君為筮卦。……(中略)……巨君曰、汝は無狀之人。病安得愈。季山曰、愿為發之。巨君曰、汝曾將客行、為父報讐。於道殺客、納空井中、大石蓋其上。此人訴天府、以此病謫汝者。季山曰、実有此罪。巨君曰、何爾耶。季山曰、父昔為人所搏。恥蒙此以終身。時与客報之未能、客欲告怨主。所以害之。巨君曰、冥理難欺、汝自勤修。吾還山請命。季山漸愈。巨君伝季山筮、季山遂善於易占。但不知求巨君度世之方、惜哉。

張巨君は、何許の人なるかを知らざるなり。時に許季山有り、病を得て愈えず、清齋し泰山を祭り命を請い、昼夜祈訴す。忽ち神人有り来たり問いて曰わく、「汝是れ何人ぞ。何事か苦しみ幽冥に告げんや。天我をして来り汝に問わしむ。実を以て対うべし」と。季山曰わく、「僕はれ東南平輿の許季山なり。病を抱うるに三年、罪の所在を知らず、故に靈山に到り、請う死生を決めん」と。神人曰わく、「我是れ仙神の張巨君なり。吾易道有り、以て汝の禍祟の從う所を知るべし」と。季山因りて再拜して請いて曰わく、「幸いに神仙遷降す。願わくは告示を垂れん」と。巨君筮卦を為す。……(中略)……巨君曰わく、「汝是れ無狀の人なり。病安ち愈ゆを得」と。季山曰わく、「愿みて為に之れを發かん」と。巨君曰わく、「汝曾て客を將つて行き、父の為に報讐す。道において客を殺し、空の井中に納め、大石其の上に蓋う。此の人天府に訴え、此れを以て

病汝を謫む」と。季山曰わく、「実に此の罪有り」と。巨君曰わく、「何ぞや」と。季山曰わく、「父昔人のに搏す所と為る。此れを蒙るを恥じるに身終を以てす。時に客と之れに報いるに未だ能くせず、客怨主に告げんと欲す。之れを害する所以なり」と。巨君曰わく、「冥理欺き難く、汝自ら勤修す。吾れ山に還り命を請う」と。季山漸く愈ゆ。巨君季山に筮を伝え、季山遂に易占を善くす。但だ巨君に度世の方を求むるを知らざるは、惜しいかな。

とある。ここでは、「神人曰、我是仙神張巨君。吾有易道、可以知汝禍祟所從。季山因再拜請曰、幸神仙遷降」のように、「神人」とされる張巨君は、許季山に「神仙」と呼ばれている。しかし、後の文でも張巨君はそのことを否定しない。このことから、「神仙」は、「神人」を包括する呼称として用いられていることがわかる。これは、その他の六朝時代までの書物でも同じであった。

「神人」とされる張巨君は、「張巨君者、不知何許人也」とされるように、出身地が明記されておらず、もともと人ではなさそうだ。「時」有許季山、得病不愈、清齋祭泰山請命、昼夜祈訴」「天使我来問汝」のように、病にかかった許季山が泰山を祭ったことで、許季山のもとへ天が張巨君を派遣した。「吾還山請命。季山漸愈」とあることから、張巨君が泰山から来たであろうことがわかる。つまり、「神人」とされる張巨君は、自分の意思で一般人の許季山を助けに来たわけではない。このように「神人」が一般人を積極的に助けようとしなないことは、その他の六朝時代までの書物と同じであった。

また、「巨君伝季山筮、季山遂善於易占。但不知求巨君度世之方、惜哉」とあるように、「神人」の張巨君は、許季山に易占の方法は伝えたが、「神仙」などになって世を度るほど長寿になる方法の記さ

れた書物は伝えていない。このように、「神仙」などになる方法を一般人に対して気軽に教えないことも、その他の六朝時代までの書物と同じである。

次に、「神仙」と「真人」を区別して用いている例を見ていく。この特徴も、これまで見てきた六朝時代までの書物と同じである。

『王子年拾遺記』を引用している幻術「天毒国道人」には、

燕昭王七年、沐骨之国来朝、則申毒国之一名也。有道術人名尸羅。問其年、云、百四十歳。……(中略)……善術惑之術。於其指端出浮囟十層、高三尺、乃諸天神仙、巧麗特絶。列幢蓋鼓舞、繞塔而行。人皆長五六分、歌唱之音如真人矣。

燕の昭王七年、沐骨の国来朝し、則ち申毒国の一名なり。道術有る人名は尸羅。其の年を問えば、云う、「百四十歳」と。

……(中略)……術惑の術を善くす。其の指端において浮囟十層、高さ三尺を出し、乃ち諸れ天の神仙、巧麗特絶。幢蓋を列ね鼓舞し、塔を繞りて行く。人皆長五六分、歌唱の音真人の如し。

とある。<sup>10)</sup>

ここでは、燕の昭王七(紀元前三〇六)年に申毒国にある沐骨国の人が来朝し、その中に道術の使える尸羅という人がいたとされる。尸羅は自身を一四〇歳だと言うが、「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」とは呼称されない。つまり、尸羅は道術が使える一般人である。

尸羅は指の端から高さ三尺の塔を出した。そこで美しい「神仙」が旗を持ち鼓を打って舞い、塔の周囲を回る。その「神仙」たちの歌声は「真人」のようだとされている。ここでの「神仙」は「乃諸天神仙、巧麗特絶。列幢蓋鼓舞、繞塔而行。人皆長五六分、歌唱之音如真人矣」とあるように「真人」に喩えられている。このことから、「神

仙」は「真人」と区別して用いられていることがわかる。

## 第二節 神人

これまで見てきた六朝時代までの書物の中の「神人」は、「神仙」と違って特定の個人を指す場合が多い呼称であった。「神人」は、見た目が異形な者があり、主に出身地が記されておらず、もともと人だった者がなれる呼称ではないと考えてきた。しかし、『太平広記』の中の六朝時代までの書物では、出身地が明記され、死ぬ「神人」が登場していた。

まず、出身地の明記されていない「神人」から見ていきたい。南齊・劉澄之『鄱陽記』を引用している畜獸十「李嬰」では、

有李嬰者。与弟稻、皆善用弩。曾射得一麋、解其四脚、懸置樹間、剖以為炙、列于火上、方欲共食。忽見山下有一神人、長三丈許、鼓步而来、手持大囊。既至、悉斂肉及皮骨、并列火上者于囊中。径還山去。嬰与弟稻驚駭。莫知所措、亦竟無他焉。

李嬰なる者有り。弟稻と、皆善く弩を用う。曾て射得一麋を得、其の四脚を解き、懸けて樹間に置き、剖き以て炙を為り、火上に列ね、方に共に食わんと欲す。忽ち山下一神人有り、長三丈許、鼓歩して来たり、手大囊を持つを見る。既に至り、悉く肉及び皮骨、並びに火上の者を囊中に列ぶを斂む。径ちに山に還り去る。嬰と弟稻驚駭す。措く所知る莫く、亦た竟に他無し。

とある。

ここでは、李嬰と弟の李稻が狩をして獲った麋の肉や皮全てを、身長が三丈もある「神人」に持って行かれている。ここでの「神人」は

見た目が高身長の異形であり、出身地は明記されていない。見た目が異形という「神人」の特徴は、これまで見てきた六朝時代までの書物でも見られた。このような「神人」の特徴は、もともと人だった者がないにないことに関連していると考ええる。

『冥祥記』を引用している再生三「趙泰」では、「晋趙泰字文和、清河貝丘人也。……（中略）……前有大殿、珍宝周飾、精光耀目。金玉為牀。見一神人、姿容偉異、殊好非常、坐此座上。辺有沙門。立倚甚衆。見府君来、恭敬作礼。泰問此是何人、府君致敬。吏曰、号名世尊、度人之師。（晋の趙泰字は文和、清河貝丘の人なり。……（中略）……前に大殿有り、珍宝周飾、精光耀目。金玉牀を為る。一神人、姿容偉異、殊好非常、此の座上に坐すを見る。辺りに沙門有り。立倚甚だ衆きなり。府君来たり、恭敬にして礼を作すを見る。泰問う「此れ是れ何人なるか、府君敬を致す」と。吏曰わく、「号名世尊、人を度すの師なり」と。）とある。

ここでの「神人」は、趙泰が冥土巡りをしている際に見かけた人物で、出身地は明記されていない。「神人」は、煌びやかな大殿の上座にいて、容姿は普通の人のように見えない。その「神人」の周囲には大勢の僧侶が侍っている。そこに泰山府君がやってきて、「神人」に対して恭しく拝礼する。泰山府君の敬う「神人」が何者なのか趙泰が官吏に聞くと、官吏は釈迦だと答える。

ここでは、仏教の開祖の釈迦が泰山府君より地位が高く見えるように記されている。このことから、「神人」には地位が高い印象があることがわかる。これと似た話が『太平広記』報応八法華経「趙泰」にも記されている。劉宋・劉義慶『幽明録』を引用している報応八法華経「趙泰」では、「趙泰字文和、清河貝丘人。……（中略）……見大殿、珍宝耀日、堂前有二獅子併伏、負一金玉牀。云名獅子之座。見一大人、身可長丈余、姿顔金色、項有日光、坐此牀上。沙門立侍甚衆、

四坐名真人菩薩。見泰山府君来作礼。泰問吏、何人。吏曰、此名仏、天上天下度人之師。（趙泰字は文和、清河貝丘の人なり。……（中略）……大殿、珍宝日に耀くを見、堂前二獅子併びに伏し、一金玉牀を負う有り。云う名は獅子の座。一大人、身は長丈余可り、姿顔金色、項日光有り、此の牀上に坐すを見る。沙門立ち侍ること甚だ衆く、四坐名真人菩薩。泰山府君来たり礼を作すを見る。泰吏に問う、「何人か」と。吏曰わく、「此れ名は仏、天上天下の人を度すの師なり」と。）とある。<sup>11)</sup>

ここでは、釈迦を仏と記しているが、泰山府君より地位が高く見えるのは同じである。仏は「真人」菩薩を従えているが、ここでは「神人」とは記されていない。

以下の『南越志』と『王子年拾遺記』では、「神人」が「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」と呼称されない一般人を手助けしている。<sup>12)</sup> これまで見てきた六朝時代までの書物の中の「神人」は、「真人」や「仙人」とは違い自主的に一般人を助けることはなかった。

劉宋・沈遠『南越志』を引用している蛮夷三「南越」には、「南越民不恥寇盜、其時尉陀治番禺、乃興兵攻之。有神人適下、輔佐之。家為造弩一張、一放、殺越軍万人、三放、三万人。（南越民寇盜を恥じず、其の時尉陀番禺を治め、乃ち兵を興こし之れを攻む。神人有り下に適き、之れを輔佐す。家為に弩一張を造り、一放し、越軍万人、三放し、三万人を殺す。）とある。ここでは、南越の民が集団で物を奪い取っており、その時番禺を治めていた趙佗（尉陀は趙佗の別称）は軍で南越を攻めた。その際、「神人」が降りてきて趙佗に加勢し、「神人」が弩を一度放つと越軍は一万人が死に、三度放つと三万人が死んだ。「有神人適下」とあることから、「神人」は天から降りてきて趙佗の軍を助けたようだ。このことから、「神人」は浮遊できるとわかる。ここでは、「神人」が「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」と呼称されない一

般人の趙佗を助けている。

『王子年拾遺記』を引用している徴心一帝王休徵「周武王」には、

紂之昏乱、欲殺諸侯、使飛廉・惡来誅戮賢良、取其宝器、埋于瓊台之下。使飛廉等於所近之國、侯服之内、使烽燧相統。紂登台以望火之所在。乃興師往伐其國。殺其君、囚其民、収其女樂、肆其淫虐。神人憤怒、時有朱鳥銜火、如星之照耀、以乱烽燧之光。紂乃回惑。使諸國滅其烽燧。及武王伐紂。

紂の昏乱、諸侯を殺さんと欲し、飛廉・惡来をして賢良を誅戮し、其の宝器を取り、瓊台の下に埋む。飛廉等をして近き所の國、侯服の内において、烽燧をして相統せしむ。紂台に登り以て火の在る所を望む。乃ち師を興し往き其の國を伐つ。其の君を殺し、其の民を囚え、其の女樂を収め、其の淫虐を肆す。神人憤怒し、時に朱鳥火を銜む有り、星の照耀の如く、以て烽燧の光を乱す。紂乃ち回惑す。諸國をして其の烽燧を滅せしむ。武王紂を伐つに及ぶ。<sup>13)</sup>とある。

ここでの「神人」は、朱鳥を使って紂王の狼煙を乱し、間接的に武王が紂王を伐つ手伝いをしている。ここで「神人」が武王を間接的に手伝った理由は、「紂登台以望火之所在。乃興師往伐其國。殺其君、囚其民、収其女樂、肆其淫虐。神人憤怒」とあるように、紂王の政治に怒ったからである。

以上のように、「神人」は単に困っている一般人を助けているわけではない。國が乱れた時に、趙佗や武王のような道徳的に正しい方の一般人を助けている。

次に、出身地の明記された「神人」を見ていく。これまで見てきた六朝時代までの書物の中の「神人」は、主に出身地が明記されていな

かった。そのことから、もともと人であった者はなれない呼称だと考えてきた。

しかし、『幽明録』と『高僧伝』では、出身地の明記された者が一般人に「神人」と呼称されていた。

『幽明録』を引用している神五「安世高」には、「安侯世高者、安息國王子。……(中略)……值乱、有一人逢高、唾手拔刀曰、真得汝矣。高大笑曰、我宿命負対、故遠來相償。遂殺之。有一少年云、此遠國異人、而能作吾國言、受害無難色、将是神人乎。衆皆駭異。(安侯世高は、安息國の王子なり。……(中略)……乱に値い、一人の高に逢う有り、唾きて手刀を抜きて曰わく、「真に汝を得」と。高は大笑して曰わく、「我が宿命對するに負き、故に遠く來りて相い償う」と。遂に之れを殺す。一少年有り云う、「此の遠國の異人、而して能く吾國言を作し、害を受け難色無し、將た是れ神人なるか」と。衆皆駭き異とす。)」とある。<sup>14)</sup>

安息國の王子である安侯世高は、少年に「神人」ではないかと言われる。安侯世高は超自然現象を起こしていない。少年が安侯世高を「神人」と呼んだ理由は、「此遠國異人、而能作吾國言、受害無難色、将是神人乎」とあるように、外國人なのに少年の國の言葉を喋り、被害に遭つても怒らなかつたからである。少年は、「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」と呼称されない、一般人である。

このような、出身地の明記された者が一般人に「神人」と呼称されることは、他の六朝時代の書物でも見られた。西晋・陳寿『三国志』魏書・方技伝の管輅伝の注が引く魏・管辰『輅別伝』には、

利漕民郭恩、字義博、有才学、善周易・春秋、又能仰觀。輅就義博読易、数十日中、意便開發、言難踰師。於此分著下卦、用思精妙、占爨上諸生疾病死亡貧富喪衰、初無差錯、莫不驚怪、謂之神人也。

利漕の民の郭恩、字は義博、才学有り、『周易』・『春秋』を善くし、又た能く仰観す。輅義博に就きて『易』を読み、数十日中、意便ち開發し、言難くして師を踰ゆ。此に於いて著を分けて卦を下し、思を用いることは精妙にして、鬻上の諸生の疾病死亡貧富喪衰を占い、初めより差錯無く、驚怪せざる莫し、之れを神人と謂うなり。

とある。この管輅は、『三国志』魏書・方技伝の管輅伝に「管輅字公明、平原人也。(管輅字は公明、平原の人なり。)」とあり、出身地が明記されており、人である。管輅は学んだことで占いができるようになり、他の学生を占ったところまったく外れることがなかった。そのため人々は驚いて管輅を「神人」と呼んだ。

葛洪は『抱朴子』内篇・祛惑篇<sup>16</sup>で、このように占いが当たることによって民衆に「神人」と呼ばれる者について、

又術士或有偶受体、自然見鬼神、頗能内占、知人将来及已過之事、而実不能有禍福之損益也。譬如著龜耳。凡人見其小驗、便呼為神人、謂之必無所不知。……(中略)……因此細驗之、多行欺誑世人、以收財利、無所不為矣。此等與彼穿窬之盜、異途而同歸者也。

又た術士或いは偶たま体を受くる有り、自然に鬼神を見、頗る能く内占し、人の将来及び已に過ぐるの事を知れども、実は禍福の損益有らしむること能わざるなり。譬えば著龜の如きのみ。凡そ人其の小驗を見れば、便ち呼びて神人と為し、之れを謂いて必ず知らざる所無しと。……(中略)……此に因りて細かに之れを験すれば、多く世人を欺誑することを行い、以て財利を收め、為さざる所無し。此等は彼の穿窬の盜と、途を異にすれども帰を同じくする者なり。

と述べており、生まれつき鬼神を見たり、占いが得意で予知能力のある術士もいるとする。そして、災難と幸福を増減させることはできないのに、人々は術士を「神人」と呼び、知らないことは無いと言うとして、批判している。

梁・程慧『高僧伝』を引用している異僧三「釈道安」では、釈道安が人の名前を言い当てたことで一般人に「神人」だと考えられている。

至鄴、遇仏凶澄、因事澄為師。及石氏將乱、与弟子惠遠等四百余人渡河南遊。夜行值雷雨、乘電光而進。前行得人家、見門裏有一馬椿、椿之間懸一馬兜、可容一斛。安使呼林百升。主人驚出。果姓林名百升。百升謂是神人。厚相賞接。既而弟子問、何以知其姓字。安曰、両木為林、兜容百升也。

鄴に至り、仏凶澄に遇い、因りて澄に事え師と為す。石氏將に乱れんとするに及び、弟子惠遠等四百余人と河南に渡り遊ぶ。夜行き雷雨に値い、電光に乗じて進む。前み行き人家を得、門裏一馬椿有り、椿の間に一馬兜を懸け、一斛を容るべきを見る。安林百升を呼ばしむ。主人驚き出づ。果たして姓は林名は百升。百升謂えらく「是れ神人なり」と。厚く相い賞び接す。既にして弟子問う、「何を以て其の姓字を知る」と。安曰わく、「両木は林に為り、兜は百升を容るなり」と。

ここでは、鄴で仏凶澄の弟子になった釈道安が、弟子の惠遠ら四百余人とともに河南へ渡り、夜に雷雨にあう。前方の人家には、門の中に馬を繋ぐ杭があり、二本の杭の間に一斛入れられるほどの大きさの飼い葉桶がかけてあった。そこで釈道安はその家に住む林百升を呼んで来させた。林百升は名前を言い当てられ、釈道安のことを「神人」だとして、厚くもてなした。すぐに弟子が釈道安にどうして林百升の

姓と字がわかったのか聞いた。釈道安は「二本の木は林であり、飼い葉桶は百升を入れられる大きさだったからだ」と言った。

釈道安は、家の周囲の状況から林百升の名前を言い当てたことで、林百升から「神人」だと思われる。林百升は「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」ではない一般人である。そのため、仙界の仕組みを知った上で釈道安を「神人」と呼んでいるわけではない。

釈道安は「釈道安姓魏氏、常山扶柳人也。（釈道安姓は魏氏、常山扶柳の人なり。）<sup>17</sup>」のように、出身地が明記されており、もともと人である。

また、「安至其年二月八日忽告衆曰、吾当去矣。是日齋畢、無疾而卒。（安其の年二月八日に至り忽ち衆に告げて曰わく、「吾当に去るべし」と。是の日齋畢り、疾無くして卒す。）<sup>18</sup>」とあるように、釈道安は自身の死を予言して死ぬ。死ぬ「神人」は、他の六朝時代までの書物では見られなかった。

『高僧伝』を引用している異僧二「仏図澄」では、「石虎有子名斌、後勅以為子、勅愛之甚重。忽暴病而亡。已涉二日。勅曰、朕聞號太子死、扁鵲能生。大和尚国之神人。可急往告。必能致福。澄乃取楊枝呪之。須臾能起、有頃平復。（石虎子有り名は斌、後に勅以て子と為し、勅之を愛すること甚だ重し。忽ち暴き病にして亡す。已に二日に渉る。勅曰わく、「朕聞く號の太子死し、扁鵲能く生かすと。大和尚は国の神人なり。急ぎ往き告ぐべし。必ず能く福を致さん」と。澄乃ち楊枝を取り之を呪ふ。須臾にして能く起ち、頃く有り平復す。）<sup>19</sup>」とある。

石勅は可愛がつっていた斌が酷い病で死んだため、仏図澄に頼んで斌を蘇生してもらおう。大和尚は、「号大和尚。（大和尚と号す。）<sup>20</sup>」とあり、仏図澄のことである。ここでの「神人」は大和尚である仏図澄を指している。仏図澄のことを「神人」と呼んだのは石勅である。石勅自身

は「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」とは呼称されない、一般人である。仏図澄は、「仏図澄者、西域人也。本姓帛氏。少出家。（仏図澄は、西域の人なり。本姓は帛氏。少くして出家す。）<sup>21</sup>」のように出身地が明記されており、もともとは人である。他の六朝時代までの書物でも出身地の記載があつて「神人」とされる者は稀にいるが、その者を「神人」と呼ぶ人物はいつも「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」ではない、石勅のような一般人である。そのため、仙界の仕組みを知った上で「神人」と呼んでいるわけではない。

また、斌を蘇生したように、超自然現象を起こして自主的に一般人を助ける「神人」は、その他の六朝時代までの書物では見られなかった。仏図澄は以下のようにしばしば超自然現象を起こして一般人を助けている。

後郭黑略、将兵征長安北山羌、墮羌伏中。時澄在堂上坐、弟子法常在側。澄忽慘然改容曰、郭公陷狄。令衆生呪願。澄又自呪願。須臾更白、若東南出者活、余向則困。復更呪願。有頃曰、脱矣。後月余日、黑略還説、随羌围中東南走。馬乏、正遇帳下人推馬与之、曰、公乘此、小人乘公馬。济与不济、任命也。略得其馬、故獲免。推驗日時、正是澄呪願時也。……（中略）……澄常遣弟子向西城中市香。既行。澄告余弟子、掌中見買香弟子、在某処被劫垂死。因焼香呪願、遙救護之。弟子後還云、某月某日某処。為賊所劫、垂当見殺、忽聞香氣。賊無故自驚曰、救兵已至。棄之而走。……（中略）……澄嘗与虎共処中堂、澄忽驚曰、幽州当火災。仍取酒灑之。久而笑曰、救已得矣。虎遣驗幽州。云、爾日火從四門起、西南有黑雲来、驟雨滅之。雨亦頗有酒氣。

後に郭黑略、兵を将い長安北山の羌を征し、羌伏中に墮つ。時に澄堂に在り上に坐し、弟子法常在側に在り。澄忽ち慘然として

容を改めて曰わく、「郭公狄に陥る。衆生をして呪願せしめよ」と。澄又た自ら呪願す。須臾更に白す、「東南に出づるが若き者は活し、余向かえば則ち困しむ」と。復た更に呪願す。頃く有りて曰わく、「脱す」と。後月余日、黒略還り説く、「羌の囲いに随いて東南に走る。馬乏れ、正に帳下の人に遇い馬を推し之に与え、曰わく、「公此れに乗り、小人公の馬に乗る。済ると濟らざるとは、命に任すなり」と。略其の馬を得、故に獲免る」と。推して日時を驗せば、正に是れ澄の呪願の時なり。……(中略)……澄常に弟子をして西城中に香を市わしむ。既に行く。澄余りの弟子に告ぐ、「掌中に香を買う弟子、某処に在り劫かされ死に垂んとするを見る」と。因りて香を焼き呪願し、遙かに之を救護す。弟子後に還り云う、「某月某日某処。賊の劫かす所と為り、垂んとして当に殺されんとし、忽ち香氣を聞く。賊故無く自ら驚きて曰わく、「救兵已に至る」と。之れを棄てて走る」と。……(中略)……澄嘗て虎と共に中堂に処り、澄忽ち驚きて曰わく、「幽州当に火災あるべし」と。仍て酒を取り之に灑ぐ。久しくして笑いて曰わく、「救い已に得」と。虎遣いして幽州を驗さしむ。云う、「爾の日火四門より起き、西南に黒雲有り来たり、驟雨之れを滅す。雨亦た頗る酒氣有り」と。

遠方から酒によつて雨を降らせ幽州の火災を消火した話は、『神仙伝』欒巴が遠方から酒を吹くことで蜀の消火をした話と似ている「欒巴、蜀人也。……(中略)……巴為尚書、正旦会、群臣飲酒、巴乃含酒起、望西南嚶之、奏云、臣本郷成都市失火。故為救之。帝馳駅往問之、云、正旦失火、時有雨自東北来滅火、雨皆作酒氣也。(欒巴は、蜀人なり。……(中略)……巴尚書と為り、正旦会し、群臣酒を飲み、巴乃ち

酒を含み起ち、西南を望み之れを嚶き、奏み云う、「臣本郷成都市失火す。故に為に之れを救う」と。帝駅を馳せ往き之れを問わしめ、云う、「正旦失火し、時に雨有り東北より来たり火を滅し、雨皆酒氣を作すなり」と。……(中略)……

仏図澄は他にも以下に示す四点(器に青蓮華を生じさせること、見た目が異形であること、予言をすること、自身に対して蘇生の超自然現象を起こすこと)のような、超自然現象を起こしていた。

まず、器に青蓮華を生じさせる超自然現象から見ていく。

「召澄問曰、仏道有何靈驗。澄知勒不達深理、止可以道術為教、……(中略)……即取器盛水、焼香呪之。須臾生青蓮華、光色曜日。勒由此信伏。(澄を召して問いて曰わく、「仏道何の靈驗有りや」と。澄勒の深理に達せざるを知り、止だ道術を以て教えを為すべく、……(中略)……即ち器を取り水を盛り、香を焼き之れを呪る。須臾青蓮華、光色日に曜くを生ず。勒此れにより信伏す。……)とあるように、仏図澄は器に水を入れて焼香して祈ることで、光り輝く青蓮華を生じさせる超自然現象を起こしている。この道術によつて仏図澄は石勒を信伏させている。

二つ目は、見た目が異形なことである。「澄左乳旁先有一孔。围四五寸、通徹腹内。有時光從中出、或以絮塞孔。夜欲読書、輒拔絮、則一室洞明。又齋日輒至水辺、引腸洗之、還復内中。(澄左乳の旁に先ず一孔有り。围四五寸、腹内に通徹す。時に光中より出づ有り、或は絮を以て孔を塞ぐ。夜に書を読まん欲し、輒ち絮を抜けば、則ち一室洞明す。又た齋日に輒ち水辺に至り、腸を引き之れを洗い、還ち復た中に内む。……)とあり、左胸の傍に孔が一つ空いている異形である。仏図澄はその穴から腸を引き出して洗うこともあり、孔を塞いでいる真綿を抜くと部屋を明るくするほどの光が漏れて夜に読書できた。

三つ目は、予言をすることである。

勒自葛陂還河北、過坊頭、人夜欲斫宮。澄語黒略曰、須臾賊至、

可令公知。果如其言。有備故不敗。……(中略)……至建平四年四月、天靜無風、而塔上一鈴独鳴。澄謂衆曰、鈴音云、国有大喪。不出今年矣。是歲七月勒死。……(中略)……虎嘗昼寢。夢見群羊負魚、從東北來。寤已訪澄。澄曰、不祥也。鮮卑其有中原乎。慕容氏後果都之。

勒葛陂より河北に還り、坊頭を過ぎ、人夜に營を斫らんと欲す。澄黒略に語りて曰わく、「須臾にして賊至る、公に知らしむべし」と。果たして其の言の如し。備え有り故に敗れず。……(中略)……建平四年四月に至り、天靜まり風無く、而れども塔上の一鈴独り鳴る。澄衆に謂いて曰わく、「鈴の音云う、「国に大喪有り。今年を出でず」と。是の歳七月勒死す。……(中略)……虎嘗て昼寢す。夢に群羊魚を負い、東北より來たるを見る。寤め已れ澄に訪う。澄曰わく、「不祥なり。鮮卑其れ中原に有らんか」と。慕容氏後に果たして之れに都す。

ここでは、仏図澄が賊が來ることを予言し、黒略に伝言させて石勒を救っている。また、仏図澄は風が無いのに塔の上の鈴が鳴ったことから、今年中に国で大喪があると言ひ、予言通り七月に石勒が死んだ。他にも、昼寢をしていた石虎の夢で魚を背負った羊の群が東北から來たことから、鮮卑が攻めてくることを予言した。

四つ目は、自身に対して蘇生の超自然現象を起こすことである。仏図澄が自身に対して蘇生の超自然現象を起こしている場面は以下の通りである。

虎愴然曰、不聞和尚有疾。乃忽爾告終。即自出至寺而慰諭焉。澄謂虎曰、出生死、道之常也。……(中略)……虎悲動嗚咽、知其必逝、即為鑿壙宮墳。至十二月八日、卒於鄴宮寺。……(中略)……初虎殮澄以生時錫杖及鉢内棺中。後再閱窆位、開棺唯得

鉢杖。不得見屍。或言、澄死之日、有人見澄於流沙。虎疑其不死、因發墓開棺視之、唯見一石。

虎愴然として曰わく、「和尚の疾有るを聞かず。乃ち忽ち爾り終わりを告ぐ」と。即ち自ら出で寺に至りて慰諭す。澄虎に謂いて曰わく、「生死を出入するは、道の常なり」と。……(中略)……虎悲動嗚咽し、其の必ず逝くを知り、即ち為に壙を鑿ち墳を営む。十二月八日に至り、鄴の宮寺に卒す。……(中略)……初め虎澄を殮め生くる時の錫杖及び鉢を以て棺中に内む。後に再閱位を窆い、棺を開き唯だ鉢杖を得。屍を見るを得ず。或は言う、澄死するの日、人の澄を流沙に見る有り。虎其の死せざるを疑い、因りて墓を發き棺を開き之れを視、唯だ一石を見る。

ここでは、石虎に別れを告げて死んだ仏図澄が、後に棺を開けられると中に屍が無く、鉢杖または石だけが残されていた。このことや、仏図澄が死んだ日に仏図澄を流沙で見た人がいたという話は仏図澄の蘇生を示しており、これらは尸解仙の特徴である。しかし、管見の限りでは、その他の六朝時代までの書物の中で、「神人」と呼称された者で尸解仙とされた者はいなかった。

葛洪は『抱朴子』内篇・論仙篇に『仙經』を引いて、天仙・地仙・尸解仙の地位について「按仙經云、上士拳形昇虛、謂之天仙。中士遊於名山、謂之地仙。下士先死後蛻、謂之尸解仙。(按ずるに仙經に云う、「上士は形を拳げ虚に昇る、之れを天仙と謂う。中士は名山に遊ぶ、之れを地仙と謂う。下士は先ず死して後に蛻す、之れを尸解仙と謂う」と。)」と述べている。ここでは、地位の高い順に天仙・地仙・尸解仙とされている。天仙は「浮遊」し、尸解仙は「蘇生」や「骸の消失」の超自然現象を起こすという特徴がある。「蘇生」ということは、一度

は死ななければならぬ。死ぬということは人と同じで超越的な存在とは言い難い。そのため、尸解仙は最も地位が低いとされたのだろう。

これまで見てきた六朝時代までの書物では、「神人」と「仙人」を包括する呼称である「神仙」を除くと、「神人」・「真人」・「仙人」の中で自身に対して蘇生の超自然現象を起こしていたのは「仙人」のみであった。そのため、「神人」・「真人」・「仙人」の中で「仙人」の地位が最も低いと考えた。<sup>28)</sup>

しかし、仏教の伝記集である『高僧伝』では、一般人に「神人」と呼称された釈道安と仏図澄が一度死ぬという尸解仙の特徴を有していた。これは、他の六朝時代までの書物では見られない「神人」の特徴であった。おそらく、仏教が神仙思想を取り込む過程で、蘇生するという「仙人」の特徴を持つ「神人」を新たに作り出したのだろう。

### 第三節 真人

これまで見てきた六朝時代までの書物の中の「真人」は、「仙人」ほど多くないが出身地の明記されることがあり、もともと人だった者にもなれる存在であった。

『太平広記』の中の六朝時代までの書物では、出身地の明記されない「真人」のみ登場しており、一般人を助ける場合があった。これは、その他の六朝時代までの書物でも見られる特徴である。

まず、特定の個人を指さない呼称として用いられた「真人」から見ていきたい。『漢武内伝』を引用している神仙三「漢武帝」では、天地創造の頃の話をする西王母の言葉に「昔上皇清虚元年、三天太上道君、下觀六合、瞻河海之長短、察丘山之高卑、立天柱而安於地理、植

五岳而擬諸鎮輔、貴崑陵以舍靈仙、尊蓬山以館真人、安水神乎極陰之源、棲太帝于扶桑之墟。(昔上皇の清虚元年、三天太上道君、下り六合を觀、河海の長短を瞻、丘山の高卑を察、天柱を立てて地理を安んじ、五岳を植てて諸鎮輔を擬り、崑陵を貴び以て靈仙を舍し、蓬山を尊び以て真人を館し、水神を極陰の源に安んじ、太帝を扶桑の墟に棲ましむ。)とある。<sup>29)</sup>ここで「真人」は蓬山に住んでおり、特定の個人を指さない呼称として用いられていた。ここでは「真人」が天地創造の頃から存在していると考えられている。

次に、特定の個人を指す呼称として用いられた「真人」を見ていく。

『漢武内伝』を引用している神仙三「漢武帝」では、「上元夫人曰、……(中略)……此是太虚群文真人赤童所出。伝之既自有男女之限禁。又宜授得道者。恐徹下才、未応得此耳。王母色不平、乃曰、天禁漏泄、犯違明科、伝必其人、授必知真者。夫人何向下才而説其靈飛之篇目乎。(上元夫人曰わく、「……(中略)……此れ是れ太虚の群文真人赤童の出だす所なり。之れを伝うに既に自ら男女の限禁有り。又た宜しく道を得る者に授くべし。恐らく徹は下才なり、未だ応に此れを得べからざるのみ」と。王母色平らかならず、乃ち曰わく、「天禁漏泄、明科を犯違し、伝うに必ず其の人、授くに必ず真を知る者なり。夫人何ぞ下才に向かいて其の靈飛の篇目を説かんや」と。)とある。<sup>30)</sup>

ここでの「真人」は、「真人赤童」という個人を指している。上元夫人は凡人である徹(武帝劉徹)に対して靈飛の篇目について話そうと考えるが、西王母は真理を知らない平凡な人物に話すのは罪に当たると指摘する。

このような、書物を与えることは気軽にはならないという話は、『抱朴子』にも登場していた。『抱朴子』内篇・金丹篇では、「凡

人有至信者、可以棄与之。不可輕伝其書。必両受其殃。天神鑑人甚近、人不知耳。(凡そ人の至信有る者は、棄を以て之れに与うべし。輕がるしく其の書を伝うべからず。必ず両つながら其の殃を受けん。天神人を鑑みること甚だ近く、人知らざるのみ。)とあり、棄は与えても良いが、書物を受けることは氣軽にして良いことではないとされていた。

『高僧伝』を引用している異僧四「杯渡」には、

時吳部民朱靈期使高麗還。值風、舶飄經九日、至一洲辺。洲上有山。山甚高大。入山採薪、見有人於路。靈期乃將數人隨路告乞。行十余里。聞磬声香煙、於是共称仏礼拜。須臾見一寺甚光麗、多是七宝莊嚴。又見十余石人。乃共礼拜。還反行少許、聞唱道声。還往更看、猶是石人。靈期等相謂、此是聖僧。吾等罪人、不能得見。因共竭誠懺悔。更往、乃見真人。為期等設食。食味是菜。而香美不同。衆食竟、共叩頭礼拜、乞速還至郷。有一僧云、此間去都乃二十余万里。……(中略)……別有一青竹杖。謂期言、但擲此杖置舫前水中、閉目静坐、不仮勞力、必令速至。……(中略)……即具如所示、唯聞舫従山頂樹木上過。都不見水。經三日、至石頭淮而住。亦不復見竹杖所在。

時に吳部の民の朱靈期高麗に使用して還る。風に値い、舶飄り九日を経、一洲の辺に至る。洲上に山有り。山甚だ高大なり。山に入り薪を採り、路に人有るを見る。靈期乃ち數人を將いて路に随い告げ乞う。十余里を行く。磬声香煙を聞き、是において共に仏を称し礼拜す。須臾にして一寺の甚だ光麗にして、多く是れ七宝莊嚴なるを見る。又た十余の石人を見る。乃ち共に礼拜す。還た反して少し許り行き、唱道の声を聞く。還た往き更に看るに、猶お是れ石人なり。靈期等相い謂いて曰わく、「此れ聖僧なり。吾等は罪人、見るを得る能わず」と。因りて共に

竭誠懺悔す。更に往き、乃ち真人を見る。期等の為に食を設く。食味は菜なり。而れども香美同じからず。衆食べ竟り、共に叩頭礼拜し、速やかに還た郷に至るを乞う。一僧有り云う、「此の間都を去ること乃ち二十余万里なり」と。……(中略)……別に一青竹杖有り。期に謂いて言う、「但だ此の杖を擲ち舫前の水中に置き、目を閉じ静坐すれば、勞力を仮らず、必ず速やかに至らしむ」と。……(中略)……即ち具に示す所の如くすれば、唯だ舫山頂の樹木の上より過ぐを聞くのみ。都て水を見ず。三日を経て、石頭淮に至りて住む。亦た復た竹杖の在る所を見ず。

とある。朱靈期は高麗から帰る船で、嵐にあつて漂流し、九日後に島に流れ着いた。島の上には高山があり、朱靈期は山に入つて薪を採つた。その道中に人を見かけ、朱靈期は數人とともに物乞いしようとして十余里を歩いた。磬の音が聞こえてきて香が漂つてきたので、皆は仏の名前をとなくて礼拜した。するとすぐ、七宝で飾られた非常に美しい寺が見えた。そこには十余の石人があつた。そこで皆は礼拜して少し引き返すと、唱道の声が聞こえてきた。また戻り見ると、やはり石人であつた。朱靈期たちは互いに「此れは聖僧で、我々のような罪深い者には見ることができないのだ」と言つた。そこで皆懺悔した。改めて行くと、「真人」を見、「真人」は朱靈期たちのために食事を用意してくれた。

ここでの「真人」は、僧を指しているが、僧は人間というより、超自然的な存在のように見える。

「為期等設食。食味是菜。而香美不同」とあるように、「真人」が出してくれた食事は野菜だったが、味はこの世のものと同じではなかつた。皆は食べ終わつて礼拜し、はやく故郷に戻りたいと願うと、僧の

一人に「ここは都を去ること二十余万里だが、誠意があればはやく戻れないことはない」と言われる。ここでは、「有一僧云」とあるように、僧は複数人存在していたようである。このことからすると、「又見十余石人」とあった石人が「真人」の正体なのかもしれない。

朱霊期は「真人」に指示された通り、一本の青い竹の杖を水の中に入れ、目を閉じて静かに座っていた。「唯聞舫従山頂樹木上過。都不見水」とあることから、船は山頂の樹木の上を飛んでいたようである。「経三日、至石頭淮而住。亦不復見竹杖所在」とあることから、朱霊期たちが石頭淮に到着すると、帰国を補助してくれた竹の杖はどこにも見当たらなくなっていた。

ここでは、「真人」が一般人である朱霊期たちを助けていた。このように「真人」が一般人を助けることは、その他の六朝時代までの書物でも見られる特徴であった。

#### 第四節 仙人

これまで見てきた六朝時代までの書物の中の「仙人」は、主に出身地が明記されており、もともと人だった者にもなれる存在であった。尸解仙のように、蘇生する者にもなれるのが「仙人」であったため、人間にとっては一度も死なない「神人」や「真人」より比較的なるのが簡単な呼称だと考えてきた。

『太平広記』の中の六朝時代までの書物では、出身地の明記されない「仙人」のみ登場しており、長寿であったり、浮遊の超自然現象を起こしたりしていた。これは、その他の六朝時代までの書物でも見られる特徴である。

まず、特定の個人を指さない呼称として用いられた「仙人」から見

ていきたい。『漢武内伝』を引用している神仙三「漢武帝」には、「王母曰、此子勤心已久、而不遇良師、遂欲毀其正志、当疑天下必無仙人。(王母曰わく、「此の子心を勤め已に久しくして、良師に遇わず、遂に其の正志を毀たんと欲し、当に天下必ず仙人無しと疑わんとす」と。)」とある。<sup>32)</sup>ここでは、長い間良い師に巡りあわなかった武帝が、ついに心が折れて、この世に「仙人」がいのではないかと考え、今にも「仙人」の存在を疑いそうだったと西王母に指摘されている。ここでの「仙人」は、特定の個人を指さない呼称として用いられている。

『王子年拾遺記』を引用している伎巧一「淫溲浦」では、「昔始皇為塚。斂天下瓌異。生殉工人。……(中略)……先所埋工匠於塚内、至被開時皆不死。巧人於塚裏、琢石為竜鳳仙人之像、及作碑辭讚。及漢初發此塚。(昔始皇塚を為る。天下の瓌異を斂む。工人を生殉す。……(中略)……先に埋める所の工匠塚裏において、開かる時に至り皆死せず。巧人塚内において、石を琢みき竜鳳仙人の像を為り、及び碑辭讚を作る。漢初に及び此の塚を發く。)」とある。<sup>33)</sup>

ここでの「仙人」は、始皇帝の墓に生きたまま殉葬された工人たちが作っていた「仙人」の像であり、特定の個人を指さない呼称として用いられている。この工人たちは、漢代の初めに始皇帝の墓を開いた時にまだ生きていたとされるが、「仙人」になったとは記されていない一般人である。

次に、特定の個人を指す呼称として用いられた「仙人」を見ていく。『漢武内伝』を引用している神仙三「漢武帝」では、

帝閑居承華殿、東方朔、董仲君在側。忽見一女子、著青衣、美麗非常、帝愕然問何人。対曰、我墉宮玉女王子登也。向為王母所使、從崑崙山來。……(中略)……言訖、玉女忽然不知所。帝

問東方朔、此何人。朔曰、是西王母紫蘭宮玉女。常伝使命、往来

扶桑、出入靈州、交関常陽、伝言玄都。阿母昔出配北燭仙人、近又召還、使領命祿、真靈官也。

帝承華殿に閑居し、東方朔、董仲君側に在り。忽ち一女子、青衣を著、美麗非常なるを見、帝愕然として問う「何人ぞ」と。対えて曰わく、「我墉宮玉女王子登なり。向に王母の使う所と為り、崑崙山より来たり」と。……(中略)……言訖り、玉女忽然として在る所を知らず。帝東方朔に問う、「此れ何人ぞ」と。朔曰わく、「是れ西王母の紫蘭宮の玉女なり。常に使命を伝え、扶桑を往来し、靈州を出入し、常陽を交関し、玄都に伝言す。阿母昔出して北燭仙人に配せ、近く又た召還し、命祿を領せしむ、真に靈官なり」と。

とある。<sup>(34)</sup>ここでの「仙人」は、北燭仙人という個人を指している。北燭仙人は、王子登の夫として名前のみ登場している。王子登は、西王母の紫蘭宮の玉女である。「阿母昔出配北燭仙人」とあることから、西王母のすすめで王子登は北燭仙人と結婚したことがわかる。

漢・郭憲『漢武洞冥記』を引用している神仙六「東方朔」には、有明荖草。如金灯。折為燭、照見鬼物形。仙人窹封、嘗以此草然於夜、朝見腹内外有光。亦名洞腹草。帝判此草為蘇、以塗明雲之觀、夜坐此觀、即不加燭。亦名照魅草。採以籍足、則入水不沉。明荖草有り。金灯の如し。折り燭と為し、鬼物の形を照見す。仙人窹封、嘗むるに此の草を以てし夜に然やし、朝腹の内外光有るを見る。亦た洞腹草と名づく。帝此の草を剉りて蘇と為し、以て明雲の觀に塗り、夜此の觀に坐せば、即ち燭を加えず。亦た照魅草と名づく。採り以て足に籍けば、則ち水に入らず。も沉まず。

とある。<sup>(35)</sup>ここでの「仙人」は、東方朔が語った話の中に登場する窹封

という個人を指している。「仙人」である窹封は、光を放つ明荖草を食べて夜に燃やし、朝になって腹中と周囲が光っているのを見た。明荖草は、足の下に敷けば水に入っても沈まないとされている。

劉宋・劉敬叔『異苑』<sup>(36)</sup>卷三を引用している畜獸七「鼠」では、「唐鼠形如鼠、稍長、青黑色。腹辺有余物如腸。時亦脫落。亦名易腸鼠。昔仙人唐昉拔宅昇天、鶏犬皆去、唯鼠墜下、不死而腸出数寸。三年易之。俗呼為唐鼠。城固川中有之。(唐鼠は形鼠の如く、稍長く、青黑色なり。腹辺余物腸の如き有り。時に亦た脫落す。亦た易腸鼠と名づく。昔仙人唐昉宅を抜き昇天し、鶏犬皆去り、唯だ鼠墜下し、死せずして腸数寸出づ。三年にして之れ易う。俗に呼びて唐鼠と為す。城固の川中之れ有り。)」とある。<sup>(37)</sup>

ここでは、「仙人」の唐昉が昇天した際に鶏や犬はともに昇天できなかったが、鼠だけは昇天できずに墜落して腸が数寸出た。そのため、城固の川にいる鼠は、腹の辺りに腸のような物があり、唐鼠や易腸鼠と呼ばれる。ここでの「仙人」は唐昉を指しており、飛ぶという超自然現象を起こしている。

この唐昉は、『神仙伝』の「李八伯」に登場する唐公昉と同一人物であろう。『神仙伝』「李八伯」には、「李八伯者、蜀人也。莫知其名。……(中略)……知漢中唐公昉求道而不遇明師。……(中略)……以丹經一卷授公昉、公昉入雲台山中合丹、丹成便登仙去。今拔宅之処、在漢中也。(李八伯は、蜀の人なり。其の名を知る莫し。……(中略)……漢中の唐公昉道を求めて明師に遇わざるを知る。……(中略)……丹經一卷を以て公昉に授け、公昉雲台山中に入り合丹し、丹成り便ち登仙して去る。今拔宅の処、漢中に在るなり。)」とある。唐公昉は、李八伯の試練に合格したことで、丹經一卷を授けられ、登仙している。このように、『神仙伝』では唐公昉は「仙人」とは明記されていない。「今拔宅之

処、在漢中也」とあるように、登仙の仕方は『太平広記』の「拔宅昇天」と共通している。また、唐公昉が登仙した場所は漢中市で、『太平広記』の唐鼠が住む城固県は漢中市にあり、その点も『神仙伝』と同じである。

『王子年拾遺記』を引用している禽鳥二「沉鳴鷄」には、「建安三年、胥凶国献沉鳴石鷄。色如丹、大如燕。……（中略）……道師云、昔仙人桐君採石、入穴数里、得丹石鷄、舂碎為藥。服者令人有声氣、後天而死。（建安三年、胥凶国沉鳴石鷄を献ず。色丹の如く、大きさ燕の如し。……（中略）……道師云う、「昔仙人桐君石を採り、穴に入ること数里、丹石鷄を得、舂碎し藥を為る。服する者人をして声氣有たしめ、後天にして死す」と。）とある。<sup>(38)</sup>

ここでの「仙人」は、桐君を指している。桐君は『隋書』経籍志子部医方に「『桐君藥録』三卷」と記されており、ここでも薬とともに登場している。

「仙人」の桐君は石をとるために穴に数里入って丹石鷄を得、砕いて薬を作った。その薬を服用した者は人に氣を保たせることができ、自然のめぐりより遅れて死んだ。このことからすると、薬の効果は、長寿のようである。「仙人」が長寿の超自然現象を起こすのは、その他の六朝時代までの書と同じである。

## おわりに

これまで述べてきたことを整理すると、以下のようになる。

『太平広記』の中の六朝時代までの書物に登場する「神仙」は、主に特定の個人を指さない呼称として用いられていた。この特徴は、これまで見てきた六朝時代までの書物と同じであった。また、「神仙」

は「神人」を包括する呼称として登場しており、「神仙」と「真人」は区別して用いられていた。この特徴も、これまで見てきた六朝時代までの書物と同じであった。

「神人」は、「神仙」と違って特定の個人を指しており、主に出身地が記されておらず、浮遊したり、見た目が異形な者もおり、もともと人だった者がなれる呼称ではなかった。また、「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」ではない一般人が、出身地の明記されている人間を「神人」と呼ぶことがあった。これらの特徴も、これまで見てきた六朝時代までの書物と同じであった。一般人に「神人」と呼ばれた者の中には、一般人を助ける者や、死ぬ「神人」がいた。死ぬ「神人」は『高僧伝』のみ登場しており、仏図澄は自身に対して蘇生の超自然現象を起こしていた。これは、他の六朝時代までの書物では見られない「神人」の特徴であった。『冥祥記』を引用している再生三「趙泰」では、「神人」とされる釈迦が泰山府君より地位が高く見えるように記されていた。このように、仏教が神仙思想を取り込む過程で、蘇生する特徴を持つ「神人」を新たに作り出したのだろう。とはいえ、「神人」に天仙・地仙・尸解仙の中で最も地位の低い尸解仙の死ぬ特徴を持たせたことは、「神人」の地位を低下させたのではないかと考える。「真人」は、主に特定の個人を指しており、一般人を助ける場合があった。六朝時代までの書物の中の「真人」は、「仙人」ほど多くないが出身地の明記される者もいた。第二節「神人」で取り上げた『幽明録』を引用している報応八法華経「趙泰」では、仏が「真人」や泰山府君より地位が高く見えるように記されていた。「真人」を従える者は、その他の六朝時代までの書物では見られなかった。そのため、これまで「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」の中で最も地位が高いのは「真人」ではないかと考えてきた。その点からも、仏の地位は高く

見えた。

「仙人」は、主に特定の個人を指しており、長寿や浮遊の超自然現象を起こしていた。これは、その他の六朝時代までの書物でも見られる特徴であった。

以上のように、『太平広記』の中の六朝時代までの書物に登場する「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」像と、これまで考察してきた六朝時代までの「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」像とは、主に変化がなかった。しかし、仏教関係の登場人物（神人）が起こした超自然現象は、これまで見てきた六朝時代までの書物の中の「神人」の特徴と異なっていた。

## 注

- (1) 「超自然現象」を人の力を超越した絶対的なものと日常生活的な怪事とを合わせた、自然界の法則を超えた現象と定義した。
- (2) 『漢書』芸文志に書名が見られるもの、または『隋書』経籍志に漢代以前の著者の名で著録されているものうち、現存している書物（尚書、『春秋左伝』、董仲舒『春秋繁露』、『春秋穀梁伝』、許慎『說文解字』、『国語』、司馬遷『史記』、班固『漢書』、班固『東觀漢記』、荀悦『前漢紀』、『逸周書』、『穆天子伝』、劉歆『西京雜記』、『列仙伝』、『洞冥記』、『山海経』、『晏子春秋』、陸賈『新語』、桓寬『塩鉄論』、劉向『新序』、劉向『説苑』、揚雄『揚子法言』、王符『潜夫論』、荀悦『申鑑』、『老子河上公章句』、『鶡冠子』、『列子』、『莊子』、鄧析『鄧析子』、『墨子』、『鬼谷子』、『呂氏春秋』、劉安『淮南子』、王充『論衡』、応劭『風俗通義』、焦延寿『焦氏易林』、『黄帝内経』、『楚辭』、蔡邕『蔡中郎集』）。
- (3) 姚聖良「史伝体例 寓言筆法——『列仙伝』『神仙伝』叙事模式探析」（『阜陽師範学院学报（社会科学版）』総第一二八、二〇〇九年第二期）
- (4) 『隋書』経籍志に六朝時代の著者の名で著録されているものうち、現存している書物（范曄『後漢書』、陳寿『三国志』、沈約『宋書』、皇甫謐『高士伝』、葛洪『神仙伝』、劉敬叔『異苑』、干宝『搜神記』、酈道元『水経注』、葛洪『抱朴子』、蕭繹『金楼子』、劉義慶『世説新語』）。
- (5) 守山閣叢書本を底本としている『新編漢魏叢書 漢武内伝』第二冊（鷺江

出版社、二〇一三年）に同文があった。

- (6) 『王子年拾遺記』は、前秦の方士である王嘉が撰した『拾遺録』を南朝梁の蕭綺が補って論評したものである。『隋書』経籍志に『拾遺録』は「偽秦姚萇方士王子年撰。」とあった。
- (7) 漢魏叢書本『王子年拾遺記』（上海涵芬楼、一九二五年）の巻四「燕昭王」に同文があった。
- (8) 古今逸史本を底本としている『新編漢魏叢書 西京雜記』第二冊（鷺江出版社、二〇一三年）に同文があった。
- (9) 拙稿『神仙伝』と六朝時代までの神仙・神人・真人・仙人像の対比——超自然現象を中心として——（『学林』七五号、中国芸文研究会、二〇二二年一月）を参照。
- (10) 『王子年拾遺記』巻四「燕昭王」には、「七年、沐胥之国来朝、則申毒国之一名也。有道術人名尸羅。問其年、云、百三十歳。……（中略）……善術惑之術。於其指端出浮屠十層、高三尺、乃諸天神仙、巧麗特絶人皆長五六分。列幢蓋鼓舞、繞塔而行。歌唱之音如真人矣。（七年、沐胥之国来朝し、則ち申毒国の一名なり。道術有る人名は尸羅。其の年を問えば、云う、「百三十歳」と。……（中略）……術惑の術を善くす。其の指端において浮屠十層、高さ三尺を出し、乃ち諸れ天の神仙、巧麗特絶にして人皆長五六分。幢蓋を列ね鼓舞し、塔を繞りて行く。歌唱の音真人の如し。）」とある。
- (11) 清代の琳瑯秘室叢書本を底本としている『幽明録』百部叢書集成初編（芸文印書館、一九六四年）には、「趙泰字文和、清河貝丘人。……（中略）……見大殿、珍宝耀日、堂前有二師子併伏、象一金玉牀。云名師子之坐。坐名真人菩薩。見泰山府君来作礼。泰問吏、何人。吏曰、此名仏、天上天下度人之師。（趙泰字は文和、清河貝丘の人なり。……（中略）……大殿、珍宝日に耀くを見、堂前二師子併びに伏し、一金玉牀を象る有り。云う名は師子の坐。一人、身は長丈六可り、姿顔金色、項日光有り、此の牀上に坐すを見る。沙門立ち侍ること甚だ衆く、四坐名真人菩薩。泰山府君来たり礼を作すを見る。泰吏に問う、「何人か」と。吏曰わく、「此れ名は仏、天上天下の人を度すの師なり」と。）とある。
- (12) 『幽明録』を引用している徵応三人臣休徵「袁安」では、「神人」が「神仙」・「神人」・「真人」・「仙人」と呼称されない一般人を手助けしていた。しかし、清代の琳瑯秘室叢書本を底本としている『幽明録』百部叢書集成初編では以下の文は見られなかったため、考察対象から除いた。「袁安父亡。母使安以鷄酒詣卜者。問葬地。道逢三書生、問安何之、具以告。書生

曰、吾知好葬地。安以鷄酒礼之。畢、告安地処、云当葬此地、世為貴公。便与別、數歩顧視、皆不見。安疑是神人、因葬其地。遂登司徒、子孫昌盛、四世五公。(袁安父亡す。母安をして鷄酒を以て卜者に詣らしむ。葬地を問う。道に三書生に逢い、安に問う「之れ何ぞや」と。具に以て告ぐ。書生曰わく「吾好き葬地を知る」と。安鷄酒を以て之に礼す。畢わり、安に告ぐる地処、云う「当に此の地に葬らば、世貴公の為なるべし」と。便ち与に別れ、數歩し顧視すれば、皆な見えず。安是の神人なるを疑い、因つて其の地に葬る。遂に司徒に登り、子孫昌盛し、四世五公なり。)」ここでは、「神人」が一般人を助けている。袁安は父親が死んで、埋葬する土地を探していたところ、道で三人の書生と出会う。書生に聞かれたため事情を話すと、書生はよい埋葬場所を知っていると云う。そこで、袁安は鷄酒を書生に振る舞った。すると、書生は袁安に埋葬地を教え、この世はあなたのものだと予言した。袁安は書生と別れて數歩行つて振り返ると、三人の書生の姿は見えなかった。書生たちは「神人」ではないかと袁安は思い、教えてもらった土地に父親を埋葬した。その後、袁安は出世して司徒になり、子孫も繁栄した。ここでの、「神人」は予言の超自然現象を起こしており、一般人を助けている。また、「便与別、數歩顧視、皆不見」のように、姿が消える超自然現象も起こしていた。

(13) 『王子年拾遺記』卷二「殷湯」では、「紂之昏乱、欲討諸侯、使飛廉、惡来誅戮賢良、取其宝器、埋於瓊台之下。使飛廉等或所近之國、侯服之内、使烽燧相統。紂登台以望火之所在。乃興師往伐其國。殺其君、囚其民、収其女樂、肆其淫虐。神人憤怒、時有朱鳥銜火、如星之照耀、乱以烽燧之光。紂乃回惑。使諸國滅其烽燧。於是億兆夷民乃歎万国已靜、及武王伐紂。(紂の昏乱、諸侯を討たんと欲し、飛廉・惡来をして賢良を誅戮し、其の宝器を取り、瓊台の下に埋む。飛廉等をして近き所の國、侯服の内に或らしめ、烽燧をして相統せしむ。紂台に登り以て火の在る所を望む。乃ち師を興し往き其の國を伐つ。其の君を殺し、其の民を囚え、其の女樂を収め、其の淫虐を肆す。神人憤怒し、時に朱鳥火を銜む有り、星の照耀の如く、乱すに烽燧の光を以つてす。紂乃ち回惑す。諸國をして其の烽燧を滅せしむ。是に於いて億兆の夷民乃ち歎び万国已に靜まり、武王紂を伐つに及ぶ。)」とある。

(14) 『幽明録』には、「安侯世高者、安息國王子。……(中略)……值乱、有一人逢高、唾手拔刀曰、真得汝矣。高大笑曰、我宿命負対、故遠來相償。遂殺之。有一少年云、此遠國異人、而能作吾國言、受害無難色、將是神人乎。衆皆駭笑。(安侯世高は、安息國の王子なり。……(中略)……乱に値い、

一人の高に逢う有り、唾きて手刀を抜きて曰わく、「真に汝を得」と。高は大笑して曰わく、「我宿命對するに負き、故に遠く來りて相償う」と。遂に之れを殺す。一少年有り云う、「此の遠國の異人、而して能く吾國言を作し、害を受け難色無し、將た是れ神人なるか」と。衆皆駭き笑う。)」とあった。

(15) 清・孫星衍平津館校刊本を底本としている王明『抱朴子内篇校釈』(中華書局、一九八五年)を用いた。

(16) 『高僧伝』は、元代の普寧藏本、明代の永樂南藏本、明代の嘉興藏本、清代の乾隆大藏本、大正藏本、金陵刻經処本を参考にしてある富世平校点『高僧伝』(中華書局、二〇一三年)を底本として用いた。『高僧伝』卷五義解二「晋長安五級寺釈道安」には、「至鄴、入中寺、遇仏図澄。……(中略)……因事澄為師。……(中略)……安与弟子惠遠等四百余人渡河。夜行値雷雨、乘電光而進。前行得人家、見門裏有二馬柳、之間懸一馬筥、可容一斛。安便呼林伯升。主人驚出、果姓林名伯升。謂是神人。厚相賞接。既而弟子問、何以知其姓字。安曰、兩木為林、筥容伯升也。(鄴に至り、中寺に入り、仏図澄に遇う。……(中略)……因りて澄に事え師と為す。……(中略)……安弟子惠遠等四百余人と河に渡る。夜行き雷雨に値い、電光に乗じて進む。前み行き人家を得、門裏二馬柳有り、之れ間に一馬筥を懸け、一斛を容るべきを見る。安便ち林伯升を呼ぶ。主人驚き出で、果たして姓は林名は伯升。謂えらく「是れ神人なり」と。厚く相い賞び接す。既にして弟子問う、「何を以て其の姓字を知る」と。安曰わく、「兩木は林に為り、筥は伯升を容るなり」と。)」とある。

(17) 富世平校点『高僧伝』に同文があった。

(18) 富世平校点『高僧伝』には、「至其年二月八日忽告衆曰、吾当去矣。是日齋畢、無疾而卒。(其の年二月八日に至り忽ち衆に告げて曰わく、「吾当に去るべし」と。是の日齋畢り、疾無くして卒す。)」とあった。

(19) 富世平校点『高僧伝』卷九神異上「晋鄴中竺仏図澄」には、「石虎有子名斌、後勒為子、勒愛之甚重。忽暴病而亡。已涉二日。勒曰、朕聞魏太子死、扁鵲能生。大和尚国中之神人。可急往告。必能致福。澄迺取楊枝呪之。須臾能起、有頃平復。(石虎子有り名は斌、後に勒子と為し、勒之を愛すること甚だ重し。忽ち暴き病にして亡す。已に二日に渉る。勒曰わく、「朕聞く魏の太子死し、扁鵲能く生かすと。大和尚は国中の神人なり。急ぎ往き告ぐべし。必ず能く福を致さん」と。澄迺ち楊枝を取り之を呪る。須臾にして能く起ち、頃く有り平復す。)」とある。

(20) 富世平校点『高僧伝』に同文があった。

(21) 富世平校点『高僧伝』に同文があった。

(22) 富世平校点『高僧伝』には、「後郭黒略、將兵征長安北羌、墮羌伏中。時澄在堂上坐、弟子法常在側、澄慘然改容曰、郭公今厄。唱云、衆僧祝願。澄又自祝願。須臾更曰、若東南出者活、余向則困。復更祝願。有頃曰、脱矣。後月余日、黒略還自説、墮羌困中東南走。馬乏、正遇帳下人推馬与之、曰、公乘此馬、小人乘公馬。濟与不濟、任命也。略得其馬、故獲免。推檢日時、正是澄祝願時也。……(中略)……澄嘗遣弟子向西域市香。既行。澄告余弟子曰、掌中見買香弟子在某処被賊垂死。因燒香祝願、遙救護之。弟子後還云、某月某日於某処。為賊所劫。垂当見殺、忽聞香氣。賊無故自驚曰、救兵已至。棄之而走。……(中略)……澄嘗与虎共昇中台、澄忽驚曰、變、幽州当火災。仍取酒灑之。久而笑曰、救已得矣。虎遣駿幽州。云、爾日火從四門起、西南有黒雲來、驟雨滅之。雨亦頗有酒氣。(後に郭黒略、兵を將い長安北の羌を征し、羌伏中に墮つ。時に澄堂に在り上に坐し、弟子法常側に在り。澄慘然として容を改めて曰わく、「郭公今厄しむ」と。唱えて云う、「僧を衆くし祝願せよ」と。澄又自ら祝願す。須臾更に曰わく、「東南に出づるが若き者は活し、余向かえば則ち困しむ」と。復た更に祝願す。頃く有りて曰わく、「脱す」と。後月余日、黒略還り自ら説く、「羌の困いに墮ち東南に走る。馬乏れ、正に帳下の人に遇い馬を推し之に与え、曰わく、「公此の馬に乗り、小人公の馬に乗る。濟ると濟らざるとは、命に任すなり」と。略其の馬を得、故に獲免る」と。推して日時を検せば、正に是れ澄の祝願の時なり。……(中略)……澄嘗て弟子をして西域に香を市わしむ。既に行く。澄余りの弟子に告げて曰わく、「掌中に香を買う弟子、某処に在り賊なわれ死に垂んとするを見る」と。因りて香を焼き祝願し、遙かに之を救護す。弟子後に還り云う、「某月某日某処において。賊の劫かす所と為り、垂んとして当に殺されんとし、忽ち香氣を聞く。賊故無く自ら驚きて曰わく、「救兵已に至る」と。之れを棄てて走る」と。……(中略)……澄常に虎と共に中台に昇り、澄忽ち驚きて曰わく、「變、幽州当に火災あるべし」と。仍て酒を取り之に灑ぐ。久しくして笑いて曰わく、「救い已に得」と。虎遣いして幽州を驗さしむ。云う、「爾の日火四門より起き、西南に黒雲有り来たり、驟雨之れを滅す。雨亦頗る酒氣有り」と。……(中略)……(23) 清代の王謨輯の増訂漢魏叢書本『神仙伝』や宋代の張君房輯の道藏本『雲笈七籤』、唐・宋の類書が引く『神仙伝』の条文を四庫全書本と校勘している胡守為『神仙伝校釈』(中華書局、二〇一〇年)を底本として用いた。(24) 富世平校点『高僧伝』には、「召澄問曰、仏道有何靈驗。澄知勒不達深理、

正可以道術為徵、……(中略)……即取罌器盛水、燒香呪之。須臾生青蓮華、光色曜目。勒由此信伏。(澄を召して問いて曰わく、「仏道何の靈驗有りや」と。澄勒の深理に達せざるを知り、正に道術を以て徵を為すべく、……(中略)……即ち器を取り罌に水を盛り、香を焼き之れを呪るべし。須臾青蓮華、光色目に曜くを生ず。勒此れにより信伏す。……)とある。

(25) 富世平校点『高僧伝』には、「澄左乳傍先有一孔。圍四五寸、通徹腹内。有時腸從中出、或以絮塞孔。夜欲読書、輒拔絮、則一室洞明。又齋日輒至水辺、引腸洗之、還復内中。(澄左乳の傍に先ず一孔有り。圍四五寸、腹内に通徹す。時に腸中より出だす有り、或は絮を以て孔を塞ぐ。夜に書を読まんと欲し、輒ち絮を抜けば、則ち一室洞明す。又た齋日に輒ち水辺に至り、腸を引き之れを洗い、還ち復た中に内む。……)とある。

(26) 富世平校点『高僧伝』には、「勒自葛陂還河北、過枋頭、人夜欲斫宮。澄語黒略曰、須臾賊至、可令公知。果如其言。有備故不敗。……(中略)……至建平四年四月、天靜無風、而塔上一鈴独鳴。澄謂衆曰、鈴音云、国有大喪。不出今年矣。是歲七月勒死。……(中略)……虎嘗昼寢。夢見群羊負魚、從東北來。寤以訪澄、澄曰、不祥也。鮮卑其有中原乎。慕容氏後果都之。(勒葛陂より河北に還り、枋頭を過ぎ、人夜に宮を斫らんと欲す。澄黒略に語りて曰わく、「須臾にして賊至る。公に知らしむべし」と。果たして其の言の如し。備え有り故に敗れず。……(中略)……建平四年四月に至り、天靜まり風無く、而れども塔上の鈴独り鳴る。澄衆に謂いて曰わく、「鈴の音云う、「國に大喪有り。今年を出でず」と。是の歲七月勒死す。……(中略)……虎嘗て昼寢す。夢に群羊魚を負い、東北より来たるを見る。寤めて澄に訪う。澄曰わく、「不祥なり。鮮卑其れ中原に有らんか」と。慕容氏後に果たして之れに都す。……)とある。

(27) 富世平校点『高僧伝』には、「虎愴然曰、不聞和尚有疾。迺忽爾告終。即自出宮詣寺而慰諭焉。澄謂虎曰、出生入死、道之常也。……(中略)……虎悲慟嗚咽、知其必逝、即為鑿壙營墳。至十二月八日、卒於鄴宮寺。……(中略)……初虎殮澄以生時錫杖及鉢内棺中。後再閱窆位、開棺唯得鉢杖。不復見屍。或言、澄死之月、有人見在流沙。虎疑不死、発棺不見屍。(虎愴然として曰わく、「和尚の疾有るを聞かず。迺忽ち爾り終わりを告ぐ」と。即ち自ら宮を出で寺を詣て慰諭す。澄虎に謂いて曰わく、「生を出で死に入るは、道の常なり」と。……(中略)……虎悲慟嗚咽し、其の必ず逝くを知り、即ち為に壙を鑿ち墳を営む。十二月八日に至り、鄴の宮寺に卒す。……(中略)……初め虎澄を殮め生くる時の錫杖及び鉢を以て棺中に内む。後に再閱位を窆い、棺を開き唯だ鉢杖を得。復た屍を見ず。或は言

う、澄死するの月、人の流沙に在るを見る有り。虎不死を疑い、棺を發き屍を見ず。」とある。

(28) 拙稿『神仙伝』と六朝時代までの神仙・神人・真人・仙人像の対比——超自然現象を中心として——『学林』七五号、中国芸文研究会、二〇二二年(二月)を参照。

(29) 『漢武内伝』には、「昔上皇清虚元年、三天太上道君、下觀六合、瞻河海之短長、察丘岳之高卑、立天柱而安於地理、植五岳而擬諸鎮輔、貴昆陵以捨靈仙、尊蓬丘以館真人、安水神乎極陰之源、棲太帝於扶桑之墟。(昔上皇の清虚元年、三天太上道君、下りて六合を觀、河海の短長を瞻、丘岳の高卑を察、天柱を立てて地理を安んじ、五岳を植て諸鎮輔を擬り、昆陵を貴びて靈仙を捨き、蓬丘を尊びて真人を館し、水神を極陰の源に安んじ、太帝を扶桑の墟に棲ましむ。)」とある。

(30) 『漢武内伝』には、「上元夫人曰、……(中略)……此是太虚群文真人赤童所出。伝之既自有男女之限禁。又宜授得道者。恐徹下才、未応用此耳。王母色不平、乃曰、若天禁漏泄、犯違明科、伝必其人、授必知真者。何縁夫人向下才而説靈飛之篇目乎(上元夫人曰わく、……(中略)……此れ是れ太虚の群文真人赤童の出だす所なり。之れを伝うに既に自ら男女の限禁有り。又た宜しく道を得る者に授くべし。恐らく徹は下才なり、未だ心に此れを用うべからざるのみ」と。王母色平らかならず、乃ち曰わく、「若し天禁漏泄、明科を犯違し、伝うに必ず其の人、授くに必ず真を知る者なり。何れに縁り夫人下才に向かいて靈飛の篇目を説かんや」と。とある。

(31) 富世平校点『高僧伝』十卷神異下「宋京師杯渡」には、「時吳郡民朱靈期使高驪還。值風、船飄經九日、至一洲辺。洲上有山。山甚高大。入山採薪、見有人路。靈期乃將数人随路告乞。行十余里。聞馨香煙、於是共称仏礼拜。須臾見一寺甚光麗、多是七宝莊嚴。見有十余僧。皆是石人、不動不揺。乃共礼拜。還反行步少許、聞唱導声。還往更看、猶是石人。靈期等相謂、此是聖僧。吾等罪人、不能得見。因共竭誠懺悔。更往、乃見真人。為期等設食。食味是菜。而香美不同世。期等食竟、共叩頭礼拜、乞速還至郷。有一僧云、此間去都乃二十余万里。……(中略)……別有一青竹杖。語言、但擲此杖置舫前水中、閉船静坐、不板勞力、必令速至。……(中略)……即具如所示、唯聞舫従山頂樹木上過。都不見水。經三日、至石頭淮而住。亦不復見竹杖所在。(時に吳郡の民の朱靈期高驪に使用して還る。風に値い、船飄り九日を経、一洲の辺に至る。洲上に山有り。山甚だ高大なり。山に入り薪を採り、人路有るを見る。靈期乃ち数人を將いて路に随い告げ乞う。十余里を行く。馨香煙を聞き、是において共に仏を称し礼拜す。須臾に

して一寺の甚だ光麗にして、多く是れ七宝莊嚴なるを見る。十余の僧有るを見る。皆な是れ石人、不動不揺。乃ち共に礼拜す。還た反して少し許り行き歩き、唱導の声を聞く。還た往き更に看るに、猶お是れ石人なり。靈期等相い謂いて曰わく、「此れ聖僧なり。吾等は罪人、見るを得る能わず」と。因りて共に竭誠懺悔す。更に往き、乃ち真人を見る。期等の為に食を設く。食味は菜なり。而れども香美世に同じからず。期等食べ竟り、共に叩頭礼拜し、速やかに還た郷に至るを乞う。一僧有り云う、「此の間都を去ること乃ち二十余万里なり」と。……(中略)……別に一青竹杖有り。語りて言う、「但だ此の杖を擲ち舫前の水中に置き、船を閉じ静坐すれば、労力を仮らず、必ず速やかに至らしむ」と。……(中略)……即ち具に示す所の如くすれば、唯だ舫山頂の樹木の上より過ぐを聞くのみ。都て水を見ず。三日を経、石頭淮に至りて住む。亦た復た竹杖の在る所を見ず。とある。

(32) 守山閣叢書本を底本としている『漢武内伝』に同文があつた。

(33) 『王子年拾遺記』卷五「前漢上」には、「昔始皇為塚。歛天下瓌異。生殉工人。……(中略)……昔生埋工人於塚内、至被開時皆不死。工人於塚内、琢石為竜鳳仙人之像、及作碑辭讚。漢初發此塚。(昔始皇塚を為る。天下の瓌異を斂む。工人を生殉す。……(中略)……昔工人を塚内に生埋し、開かる時に至り皆死せず。工人塚内において、石を琢き竜鳳仙人の像を為り、及び碑辭讚を作る。漢初此の塚を發く。)」とある。

(34) 『漢武内伝』には、「帝夜閑居承華殿、東方朔、董仲舒侍。忽見一女子、著青衣、美麗非常、帝愕然問之、女対曰、我墉宮玉女王子登也。向為王母所使、従昆山来。……(中略)……言訖、玉女忽然不知所在。帝問東方朔、此何人。朔曰、是西王母紫蘭室玉女。常伝使命、往来扶桑、出入靈州、交関常陽、伝言玄都。阿母昔出配北燭仙人、近又召還、使領命祿、真靈官也。(帝夜承華殿に閑居し、東方朔、董仲舒侍る。忽ち一女子、青衣を著、美麗非常なるを見、帝愕然として之れに問い、女対えて曰わく、「我墉宮玉女王子登なり。向に王母の使う所と為り、昆山より来たり」と。……(中略)……言訖り、玉女忽然として在る所を知らず。帝東方朔に問う、「此れ何人ぞ」と。朔曰わく、「是れ西王母の紫蘭室の玉女なり。常に使命を伝え、扶桑を往来し、靈州を出入し、常陽を交関し、玄都に伝言す。阿母昔出して北燭仙人に配せ、近く又た召還し、命祿を領せしむ、真に靈官なり」と。)」とある。

(35) 古今逸史本を底本としている『新編漢魏叢書 漢武洞冥記』第六冊(鷲江出版社、二〇一三年)には、「有明荃草。夜如金灯。折枝為炬、照見鬼物之

形。仙人窳封常服此草於夜暝時、転見腹光通外。亦名洞冥草。帝令剉此草為泥、以塗雲明之館。夜坐此館、不加灯燭。亦名照魅草。以籍足履水不沉。(明基草有り。夜金灯の如し。枝を折り炬と為し、鬼物の形を照見す。仙人窳封此の草を夜の暝き時に常服し、転た腹の光外に通るを見る。亦た洞冥草と名づく。帝此の草を剉りて泥と為し、以て雲明の館に塗らしむ。夜此の館に坐せば、灯燭を加えず。亦た照魅草と名づく。以て足に籍き履けば水に沉まず。)とある。

(36) 明代の津逮秘書本を底本としている範寧校点『異苑・談薮』古小説叢刊(中華書局、一九九六年)を用いた。

(37) 『異苑』卷三には、「唐鼠形如鼠、稍長、青黑色。腹辺有余物如腸。時亦汚落。亦名易腸鼠。昔仙人唐昉拔宅升天、鶏犬皆去、唯鼠墜下、不死而腸出数寸。三年易之、俗呼為唐鼠。城固川中有之。(唐鼠は形鼠の如く、稍長

く、青黑色なり。腹辺余物腸の如き有り。時に亦た汚れ落つ。亦た易腸鼠と名づく。昔仙人唐昉宅を抜き升天し、鶏犬皆去り、唯だ鼠墜下し、死せずして腸数寸出づ。三年にして之れ易う。俗に呼びて唐鼠と為す。城固の川中之れ有り。)とある。

(38) 『王子年拾遺記』卷七「魏」には、「建安三年、胥国国献沉鳴石鶏。色如丹、大如燕。……(中略)……道師云、昔仙人桐君採石、入穴数里、得丹石鶏、春碎為藥。服之者令人有声氣、後天而死。(建安三年、胥国国沉鳴石鶏を献ず。色丹の如く、大きさ燕の如し。……(中略)……道師云う、「昔仙人桐君石を採り、穴に入ること数里、丹石鶏を得、春碎し藥を為る。之れを服する者人をして声氣有たしめ、後天にして死す」と。)とある。

(本学授業担当講師)